

ヨットマン  
復活

# 障がい者国際大会で 世界3位

青野鷹哉さん(文4)

2018 Hansa Class World & International Champion



# 推進力となった 多くの人々の優しさ

前ヨット部員で文学部4年の青野鷹哉さん(24)が昨年10月、障がい者セーリングの国際大会「2018ハンザクラスワールド&インターナショナルチャンピオンシップ」(広島市)に初出場し3位に入った。大けがから見事カムバックした。

ships in Hiroshima, Japan by adamo aono





ハンザと呼ばれる一人乗り小型ヨットは、子ども・高齢者・障がいのある人らが楽しめるように開発された。アジアでは初開催となる注目の国際レース。出帆の舞台は風光明媚で知られる瀬戸内海の広島観音マリーナだ。

セーリングナンバー「2774」の青野選手は、電動舵取り付きの「リパティ」という種目でオランダ勢に続く世界3位。表彰台に日の丸を立てた。

自身をはじめ、彼を知る多くの人々が感慨を抱いた。命が危ぶまれた事故後、初の快挙だった。



中央大学に入学した2014年の8月。旅行先の沖縄の海辺で頸椎を損傷、一時は危険な状態にあった。

海面がひざ下ほどの浅瀬を歩いていた、次の瞬間だった。前期末試験や大会出場などで、たまっていた疲れからか貧血を起こした。倒れた場所が波底の陥没で、そこに頭から落下した。

同行の友人は青野さんの姿が見えなくなっても、潜っている、とみていたようだ。青野さんはマリンスポーツの練達者、水の申し子だ。

海面に体が浮いてきたところをライフセーバー(救命隊)が発見し、現場へ急行した。居合わせた休暇中の医師が蘇生処置をした。

病院へ搬送され、緊急手術を受けた。その後は入院治療、リハビリ、車いす、休学…19歳の生活スタイルは一変した。

休学は2014年後期からで、復学したのは2016年4月、再び1年生からのスタートとなった。大けがから1年9カ月余りが経っていた。

福岡県内の病院でリハビリ生活を送った。九州はセーリング競技が盛んで見舞客は関係者が多く、大会の前後にやってきた。

話題は自然とセーリングになるのだが、「海が怖くて、テレビで海の中が映し出されると動悸がしたものです」

毎回励まされているうちに気持ちが変わり、再び海を見ることにした。カムバックを決めた日は絶好のコンディション。海が「お帰りなさい」と歓迎してくれたようだった。「やっぱり、海はいいな、と思いましたね」

父と母は学生時代からダイビングやマリンスポーツに親しんできた。両親に連れられて海へ行くようになり、セーリングは小学生高学年から始めた。

地元・愛媛県で2017年国体があり、ジュニア選手育成につながる体験教室に参加した。体験教室では飽き足らず、セーリングを競技として捉え、中学・高校と続けてきた。

大学進学では学業とセーリングの両立を第一に考えた。自らに合っていたのが中大だった。神奈川県葉山町に練習拠点を置くヨット部に入部した。1年生の履修全教科の前期単位を修得、部活動も手応えをつかんだ頃、事故に遭ってしまった。

事故直後、沖縄の病院で出会い、



# Disabled Yachtsman Races Again

リハビリ病院へ転院するまでの2カ月間、「お世話になった方は数え切れませんが、ある看護師さんには大いに励まされました。めちゃくちゃいい人でした。その人がいてくれたから立ち直れたと思います」

手厚い看護に接し、前向きに生きていこう、という気持ちになったという。

「その人が30代過ぎで、事故で亡くなってしまい、ショックでした。後日にはなりましたが仏壇に手を合わせたくて沖縄へ行ってきました。お世話になった人たちのなかでもすごくお世話になった2人が亡くなりました。もうおひとかたは福岡の病室で一緒だった50代男性で、僕のことを気にかけてくれました。人間どうなるか分からないです」

ある日、沖縄の看護師さんから、上京します、との連絡が入った。「ごはんを食べに行きましたよ」とうれしそう。旧友に会ってきたかのようだった。

## 沖縄好きです

時間の経過につれて思うのは「許容量が大きくなったことでしょうか。現実を受けとめ、できることを一つ



ずつやっています」

出身高校、松山東のスローガン『がんばっていきましょい』を実践する。そして照れながらこう付け加えた。「勉強ができるようになりましたね」

iPS細胞を用いた再生医療が現実になりつつある。

「僕の障がいも将来的には治るだろうと言われています。やる気を失って、いま何もせずにいたら、そのとき、何もない人間になってしまう。それは嫌ですものね」

今では事故のあった場所を「沖縄、好きですよ」と笑顔で話す。沖縄

の人と海がほっとしているだろう。

事態を好転させたのは、多くの人たちの絶えることのない優しさ、といえそうだ。

### 活躍がNHK国際放送で

—昨年のプレ国際大会の様子がNHK国際放送、NHKWorldで紹介された。

番組タイトルは「Disabled Yachtsman Races Again」(障がい者ヨットマンがレース復活)。

### ヨットからセーリングへ

1999年4月、財団法人・日本ヨット協会と社団法人・日本外洋帆走が統合され、財団法人・日本セーリング連盟が発足。2012年、公益財団法人に移行された。



中央大学理工学部の学生スタッフによるボランティア活動団体『りこボラ!』のメンバーが、異例ともいえる学生発案の実践型防災訓練を行った。2019年1月15日、中大後樂園キャンパスで、教室を被災現場に見立てた。自ら考え、自ら交渉し、自ら体験したのは、情報工学科3年の松田美慧さんだ。実現までの舞台裏をつづった。

普段授業を受けている教室は、照明が消されて真っ暗。サイレン音が鳴り響く模擬被災地となった。

危険な状態に陥っている人がいるのか。救助を必要としている人が何人いるのか。救助に入っていける状態なのか。何も分からない。



毛布を使って人命救助

体験型実践訓練は15~20人のチームを編成し、救助者と要救助者に分かれた。

救助者となった私は連絡用のトランシーバーを手にした。模擬被災地とのやり取りはサイレン音などにかき消され、ほとんど聞き取れない。心拍数は上がり、頭は真っ白。正常で冷静な判断ができる状況ではない。

ここが被災現場なら、私たちの周りには建物が倒壊し、おびただしい数のがれきがあり、火災が発生しているかもしれない、負傷者数は…。そんな状況を想起せずにはいられなかった。

その後の「振り返り会」では、活発な議論が交わされた。要救助者の思いはさまざまだった。

「救助の人に同じことを何度も聞かれた」「一時この場を離れますが必ず戻ってきますとの言葉にホッとした」など。

私たちは訓練での発見や心理変化を共有し、大学と地域との連携のあり方も話し合った。

中央大学ボランティアセンター  
公認学生団体

りこボラ! 2018年度副代表

**松田 美慧** (理工学部3年)

教職員と学生の繋がりをつける、地域との繋がりも意識する。

被災時に助け合うコミュニティ形成が重要と位置づけ、その一步を踏み出した。

## 難しいけど楽しい

首都圏で大きな地震が起きたらどうしよう? 学生の素朴な不安からこの実践型防災訓練企画は始まった。

当日は学生・教職員・大学近隣の地域住民ら29人が参加し、大学職員と防災専門NPO法人「エヌセルフディフェンス」(代表理事・進士智幸氏)の全面協力のもと、座学講義と体験型実践訓練、振り返り会の三部構成で行われた。

大学の防火管理者による説明で現状と対策を共有した後、トリアージ実践訓練を行った。トリアージとは災害時に要救助者のなかで、重傷とみられる人から救助するノウハウである。

トランシーバーで  
救助訓練中の松田さん



学生が発案し  
実践した  
「防災訓練」

# 災害発生時、 私たちは動けるだろうか

危機意識はボランティア経験から

後楽園キャンパスにおいて、学生提案で学生・教職員・地域住民と一緒に防災訓練を行うのは異例といわれた。

起案当初は、大学という大きな組織のなかで、どの部署のどなたに相談しているのか分からなかった。私には実現させたい！ という思いがあっても、知識も経験も不足していた。

地域活性化のボランティア先で繋がった前述のNPO法人に相談。次に多摩キャンパスに拠点を置くボランティアセンターに連絡し、りこボラ！登録者に学生有志を募った。

幸いなことに協力して下さる方々が集まり、企画は実現できるかのように思えた。が、現実は甘くなかった。

日程調整が難関だった。大学の年間スケジュールはほぼ確定済みで、新規が入り込むにはかなりの無理があった。

一時は候補日が全てなくなり実現できないとも考えた。業務多忙な教職員の方々に当日参加して頂くのも難しかった。

しかし、困難を目の前にしたときほど、なぜか力がみなぎってくる。元々、スムーズに企画が通るとは思っていなかった。この思いをつないで、試作でもいいから形にしようと話し合っただけで決めた。

終わってみるとただ楽しかった記憶しかない。

## 私を突き動かしたのは

2011年3月11日。東日本大震災の際、電車通学の小学生だった私は、帰宅困難者となった。

都心の混乱や映像で見た被災地の様子は強く胸に刻まれ、大学生になったのをきっかけに東日本大震災や2018年7月の西日本豪雨の被災地でボランティア活動をするようになっていた。

西日本豪雨被災地では、土のうをひたすら運んだ。住宅1軒から掻き出された泥土は土のう何百個分にも達する。

その一個一個が重い重い。10分ほど活動しただけで、土のうを膝上に持ち上げることが体力的に難しくなる。

ニュースを見て復興の遅さを感じていたが、現地で活動してみると復興への遠大な道のりを歩む大変さを痛感した。

宮城県石巻市牡鹿では被災者の方々にお話を伺った。「ちゃんと備えないとだめだよ」という親身な言葉が胸に刺さった。

被災地で様々な経験をして東京に帰ったとき、ふと不安がよぎった。

自分は十分な備えができていだろうか。そして、この経験を自分だけに留めておくのはもったいないと感じた。

もっと多くの人に伝え、一人でも多



西日本豪雨被災地で、ボランティアが直面した土のうの数々

くの人に防災意識を持ってもらわなくては！ という使命感に似た思いだった。

災害時には個人の力が試される。様々なきっかけで集まった企画メンバーとともに、災害時はどうなってしまおうだろうという不安を少しでも解消したい。

熱い思いを企画名にした。「来るべき災害時、あなたは動けますか？」

## 正解はない

正直なところ、迷ったときもあった。大きな企画になればなるほど、協力して下さる人が多くなり、目的の食い違いも生じた。

特に、防災は発展途上の分野で、正解が誰にも分からない。関係者の考えもそれぞれで、学内の防災意識の向上、地域との防災協力など何を

優先的に解決したらいいのかが分からず、目的を見失いかけた。

だが、それでも一步を踏み出してみる。背中を押してくださったのは、企画当初からお世話になっていた大学職員の一言だった。

「松田さんの意思は変わってないよ」

学生主体である以上、学生の思いを優先的にしてもいい、という温かい言葉。企画と一緒に進めてくれた仲間の存在も本当に大きかった。

一般の防災訓練として広報しても人はなかなか集まらない。どうしたら多くの学生や教職員の心に響く企画

りこボラ!のメンバー



になるかを連日話し合い、広報文を工夫し、教授へ協力を依頼した。

その結果、人間総合理工学科の授業において、参加学生を募る機会を頂いた。

私一人の力ではどうにもならないことが多かった。協力して頂いた一人ひとりが、かけがえのない存在になった。

本当にありがとうございました。

column

一人だけど 一人じゃない バトンを繋ぐ

一人の学生が声を上げる。微力だが、非力ではない。そう思えるのは、私が所属する『りこボラ!』の創設経緯に由来する。

りこボラ!は4年前に一人の学生の思いから創設に至った。理工学部生は人に関心なんて持たないだろうなど多くの批判もある中で団体は立ち上がり、今では150人以上の登録者を有する。問題解決のために行う企画は、りこボラ!が繋ぐ文化になりつつある。

4年間という短い大学生活、自分一人のできることは小さいかもしれ

ないが、一人の行動は問題意識を抱く次の学生の背中を押すと信じている。これは研究論文をまとめるときと同様で、一人の紆余曲折は、いずれ巨人の肩を作る。巨人の肩を作るとは科学者ニュートンの「巨人の肩に乗る」になぞらえて私が造った言葉。新しい発見は多くの失敗と成功から繋がる。

思いを繋げること・風化させないことは被災地でも団体運営においても難しい。だが、この繋がれたバトンを、今度は私も繋ぐ人でありたい。(松田)



りこボラ!

後楽園キャンパスでは、2016年から「理系でもボランティア活動を日常に!」をモットーに『りこボラ!』が活動している。活動内容は、中大学生へボランティアの楽しさや情報を伝えたり、ごみ拾いのような参加しやすい企画を提案したりと様々だ。文京区社会福祉協議会、地域住民との多世代交流も盛んである。今後は大学の学びに近づくことを念頭に、理科実験教室、アプリ作成など理系を生かした活動を目指している。